

宿に荷物をおろし、二人が待つ車に駆け戻った私が乗り込むと、車体の後部がちょっとひしゃげた稲城の白タクは再びコソコソと康定の裏通りを目指して、町外れの路地奥の駐車場に車を停めた。

「よし、ここなら誰にも見つからないからな」

無事安全な場所に車を移動させた二人は、すっかり気が楽になった様子で機嫌良く車を飛び下りると「何処に行きたい?」と私に聞いた。

うーん・・・この旅の道中で出会ってきた人達の口コミから、康定の周囲には日帰りや一泊旅行程度で行かれる温泉や、美しい湖や氷河が見られる場所があるのだと聞いていた。ビサが無くなる日までを逆算しても、あと1日、2日はどこかで寄り道できる余裕はあったし、康定に戻ったらそんな場所に立ち寄って見ようかとも考えてはいたのだが、手持ちの中国元も底をついていたし、今更観光地に行くのも「もういいや・・・」といった気分だった。

「あのね、跑馬山(パオマ山)に行きたい」

「へ・・・? 跑馬山～?」

跑馬山といえば、四川省山間部の山峡に存在する康定はこの跑馬山の山麓に広がる街で、街の何処からでも眺められるその山の名は、中国人なら誰もが知る民歌「康定情歌」にも歌われている康定を象徴する山だ。康定情歌は私がこの地を訪れるずっと以前から聞いたことがあった。韻を踏んだ歌詞とテンポの良いメロディーが印象的で好きな歌だったが、歌詞の背景などは露知らず、2003年に初めて康定を訪れた際、旅に同行していたこの土地の出身者である烏里烏沙氏が「ほら、あれが跑馬山だよ」と頭上の山を指さして、聞き覚えのあるメロディーを口ずさんだのを聞き、初めて自分が馴染のある歌の舞台となっている土地に来ていた事を知ったのだった。

それ時以来康定を訪れるのはもう既に5回目だ。自分がこよなく愛する土地としてすっかり私の心に根を下ろしているこの四川省チベットエリアの旅は、いつも康定に始まり康定に終わっている。旅の思い出の要とも言えるこの街を訪れる度、移動バスの窓から跑馬山を眺めては康定情歌を口ずさんでいた私としては、やはり是非とも一度は押さえておきたいポ

イントだった。

当初は心づもりをしていた康定近郊の氷河も温泉も、なんだか面倒に思えて取りやめてしまった私には、二人に尋ねられるまで特に何をしたい希望も予定もなかったが、あえて思いを巡らせれば旅の道連れも得たこの日は跑馬山観光の絶好の機会だ。

それというのも、いつもバスの窓から眺めていた跑馬山は、街の近郊にある観光山にありがちなロープウェイが点々と山肌に沿って登り降りしており、私もいつかあれに乗りたいと密かな希望を心の片隅で温めていたのだが、女一人でロープウェイなんてあまりにも寂しい。誰かが一緒に行ってくれなきゃ乗りたくない。

しかし、稲城の二人は跑馬山など全く興味無いらしく、私の返答には拍子抜けした様子でちょっと嫌な顔をしていた。が、やはり特にやる事など無い二人は、気乗りはしないがあんたが行きたいなら付き合うよ・・・といった面持ちで嫌々(?) 同行を承諾すると、私達3人は跑馬山の登山口に向かい、康定の街をぶらぶらと歩き始めたのだった。

パオマ〜リュウリュディ♪サ〜ンシャン♪♪・・・(跑馬溜溜的山上・・・)

二人のお供を従えて一人機嫌な私は、自分が歌詞を覚えている部分だけ何度も繰り返し康定情歌を口ずさんだ。二人には鬱陶しかった事と思うが、そのうちジャガイモ兄ちゃんの次仁扎西(チャーレン・ザーシー)にも伝染したらしく、彼も一緒になって康定情歌を口ずさみ始めたのだが酷い音痴だ。伊達男の赤シャツにとっては更に鬱陶しかった事だろう。

私達の歌が悪かったのか、跑馬山のロープウェイ乗り場に着いたところで、赤シャツは自分は登らずに下で待っていると言いだした。行きたくないものは仕方が無い。乗り気な私と本心は行きたくない次仁扎西は、まるでカップルのように2人でロープウェイに乗った。料金は確か3、40元程だったが、本心は行きたくない地元の間人にとってはお安くはない金額かと思え、そこは付き添い料として私が担当した。

そんなこんなで若干無理やり自分の要望を押し通し、めでたく乗る事ができた憧れの跑馬山ロープウェイ

イだったが、曇ったプラスチックの窓から見る景色はさほど美しくも無く、期待したほど眺めが良い訳でもない。不満である。

山頂駅に着き、ロープウェイを降りた私達は肩を並べて跑馬山の山頂付近を散策した。階段を上ると小さなお寺があり、公園があった。まだ工事が完成してないらしく脇にブロックなどが積み上げてあり、人の姿もまばらで閑散としていたが、この辺りの観光地には何処にでもいる貸し民族衣装屋が何軒も店を出し、盛んに写真を撮らないかと誘ってくる。派手な安っぽいインチキ民族衣装で張りぼての獅子に跨り、写真を取って貰うというものだ。次仁扎西がせっかく来たんだから写真を撮れば？ と言ってきたが、私はブンブン首を振り回して断った。山頂に行けば眼下の康定の街を一望にできる景色が見られるのではと期待していたが、公園の周りには木が茂っており展望はゼロ。ハッキリ言ってつまらない。ワザワザやってきた割には大不満である。

さっさと山頂を一回りした後、早々に下山。帰りはロープウェイ代を節約し登山道から歩いて下ったが、日当たりの良い山道は気持ち良く、こっちの方がずっと楽しい。これですぐさま機嫌を直した私は、次仁扎西と稲城や垂丁の話をしながらのんびり歩いた。狭い稲城垂丁の町の事で、私の大好きな垂丁村の少年も、稲城のホテルで出会った可愛い少女、夏姆(シャムウ)も、皆次仁扎西の友人なのだそうだ。「休みの日は俺の車で、みんなと景色のいい場所に遊びに行くんだ・・・」

私にとっては一時の夢の別世界だった土地に、そこを現実の場所として暮らす次仁扎西が羨ましく思えて仕方なかった。旅の道中で出会ってきた皆の顔が次々と浮かんでくる。雪を戴く霊峰が連なる壮大な景色、真っ青な空を背景にはためくタルチョ、光り輝く緑の絨毯が敷き詰められた大草原、色とりどりの高山植物で埋め尽くされる天空の花園、・・・今、そこから立ち去ろうとしている自身の立場を想うと堪らない気持ちだ。

共通の話題で親しみが増した次仁扎西に、思わず「まだ日本に帰りたくない。私も稲城に住みたい」と半ば本気で訴えていると、並んで歩いていた次仁扎西が、実にさりげなく私の肩に手をまわした。

「は？」

ちょっと～！人が感傷的になってるのを良い事に、

調子いいんじゃないの～～？

内心そうは思ったものの、次仁扎西の態度が自然で特に嫌悪を感じなかった事と、そんな男の調子良さがちょっと可笑しくも思えた私は、きっと彼流に親愛の情を表現してるのだらうと好意的に解釈し、特に彼の腕を振り払う事もしなかった。

そう高い山でも無い跑馬山は、歩いてても大して時間もかからずに下ってしまった。下山道の終点となっていた山の麓に、山肌に張り付くように立っている中国系？の小さなお寺があり、中に入ってみると建物や本尊を祭っている本堂の内部など、年月を経た山寺の様相がなかなか興味深く面白い。今まで何度も歩いていた道路沿いにある寺なのに、これまで気づいてなかったが、結局ここが一番面白かった感じだ。

私と次仁扎西は並んで本尊をお参りした。先ほど拒否を受けなかった事で調子に乗ったのか、その後も要所所でさりげなく私の肩に手をまわしていた次仁扎西は、お参りが終わった後も「さあ、行こう」と、ごく自然に私の肩を軽く抱き山門の方にいざなった。これじゃ他人が見ればまるで恋人同士だ。なんのこっちゃ。

下界に戻ると、街の中で赤シャツが若いチベット族の女の子と一緒に私達の帰りを待っていた。どうやら彼女も稲城の友人仲間らしく、次仁扎西が私を日本から来た旅行者で、稲城にいる時知り合ったのだとひとしきり彼女に紹介すると、赤シャツを隅の方に引っ張っていき、何やら軽く文句をつけている風だったのが「お前、ずるいぞ。何で俺を下に残して、あの子と一緒に居させてくれなかったんだよ」と不満げに言っているのが聞こえてしまった。どうやら好意を寄せている女子と二人で過ごすチャンスを逸した事で、赤シャツにクレームをつけているといった風だが、だったら、ついさっきまで私の肩に手をまわして歩いてたアレは何なんだ？ このお調子者～～!!

まったく男ときたら・・・内心呆れながらも、彼の手のひらを返すようなお調子者っぷりが可笑しくて、思わず心の中で吹き出してしまった私だ。多少腹立たしくもあったが、まあ跑馬山観光にも付き合っただ事だし、人の良い田舎の兄ちゃんである次仁扎西はやっぱりどこか憎めない。今回の件については男心の性として情状酌量の余地を認め、不問に伏すこととした私だった。

(次号に続く)